

## 【文部科学省委託事業】

### 発達障害のある児童生徒等に対する支援事業

（学習障害のある児童生徒等に対するＩＣＴを活用した効果的な支援に関する実践研究）

# 令和７年度成果報告書

～ 今年度までの事業実施状況と今後の展望 ～

令和８年３月３１日

能美市教育委員会  
（石川県）

# I 事業背景等・事業目標

発達障害のある児童生徒等に対する支援事業  
〔学習障害のある児童生徒等に対するICTを活用した  
効果的な支援に関する実践研究〕  
能美市教育委員会

## 事業背景・自治体における課題

### 事業背景

- 学習障害等への支援ニーズの量的・質的拡大  
全小中学校に通級指導教室を設置しているが、特別な支援を要する児童生徒が年々増加し、特性も多様化している。
- 活用可能なデジタル基盤の存在  
リーディングDXスクール事業を通じて、一人一台端末の日常的利用が定着してきており、ICT支援を導入する土台が整っている。
- 既存の人的支援の限界  
特別支援教育支援員による個別対応を行っているが、増え続けるニーズに対して人手のみのサポートを継続するには限界がある。

### 課題

- 支援ニーズの急増と多様化への対応  
通級指導利用者数が5年で4倍超となり、指導体制の構築と支援の個別最適化が急務である。
- 人的支援の限界と活用ノウハウの不足  
支援員の増員のみでは対応が限界であり、専門的評価の迅速化やICT活用による学習保障が喫緊の課題である。

## 事業目標

- 本市が推進してきたGIGAスクール構想に関するノウハウと通級指導教室の専門性を最大限に活かし、  
「ICT機器を積極的に活用した学習障害のある児童生徒の早期発見と、個別のニーズに応じた支援」を構築する。
- 学習障害のある児童生徒が通常の学級において、ICTを活用して個別最適な学びを実現し、その成果を市内全小中学校に展開するとともに、全国の地域・学校における実践の促進に資する知見を提供する。
- 学習上の困難が原因で不登校に至るケースの未然防止にも貢献し、切れ目のない支援体制を一層強化する。

## 2 事業実施体制

- ・デジタルアセスメントツールと専門家の知見を統合し、ICT活用を軸とした個別の教育支援・指導計画を策定する。
- ・専門家による研修等を通じ、LDへの理解と、通常の学級で活用可能なICT指導ノウハウを組織的に蓄積する。
- ・児童の特性に合う教材・アプリを厳選し、教育委員会と学校の連携により効果的な導入・運用を推進する。

### 企画会議

構成人数

12名

外部専門家

3名

#### 【内 訳】

- 大学関係者： 2 名
- 学校関係者： 4 名
- 関係分野関係者： 1 名  
(医療・福祉分野など)
- 事務局： 5 名

開催回数

2回

#### 【開催時期】

- ① 令和7年11月
- ② 令和8年2月

### 専門家の活用

配置人数

3名

#### 主な経歴・専門分野等

- ①石川県立特別支援学校長、金城大学社会福祉学部教授
- ②能美市教育DXアドバイザー
- ③北陸先端科学技術大学院大学非常勤講師 …等

#### 配置計画・活動内容

- 個別アセスメントと指導計画の策定支援  
デジタルアセスメントで特性を可視化し、分析結果に基づき個別最適な指導計画を策定し、あわせてICT活用の支援体制を構築する。
- 教員への専門的指導・助言・研修  
実践指導や研修を通じて教員の専門性を高め、特性に応じたツール選定の助言を行い、学校全体の組織的な支援体制を確立する。

- ・長年の通級指導実績と専門家との連携による、LD等への専門的知見とインクルーシブ教育の土壌
- ・文科省指定事業（リーディングDXスクール事業）を通じた端末の日常使いの定着と、ICTを基盤とした組織的な授業改善の推進
- ・AIドリルの家庭活用等による、児童生徒の自律的な学習習慣と個別最適化された学びの環境

## 研究実践校

### 小学校A

|       |       |
|-------|-------|
| 児童生徒数 | 554 名 |
| 教員数   | 35 名  |

(令和8年1月時点)

### 学校の特徴

特別支援教育への理解が深く、個を尊重する土壌のもと、リーディングDXスクールとして端末の日常活用が定着している。家庭でのAIドリル活用等を通じ、ICTを基盤とした自主的・自律的な学習習慣が確立している。



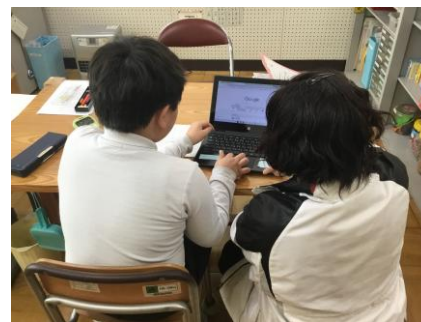
### 小学校B

|       |       |
|-------|-------|
| 児童生徒数 | 433 名 |
| 教員数   | 31 名  |

(令和8年1月時点)

### 学校の特徴

特別支援教育への深い理解と多様性を尊重する土壌のもと、専門家のアドバイスを受けインクルーシブな環境作りを推進している。14年に及ぶ通級指導の知見とリーディングDXスクール事業での組織的なICT活用により、授業改善に取り組んでいる。



# 3 取組概要・成果

発達障害のある児童生徒等に対する支援事業  
〔学習障害のある児童生徒等に対するICTを活用した〕  
効果的な支援に関する実践研究  
能美市教育委員会

## 【取組概要図】

### 事業全体の概要

#### 1.早期発見・客観的把握

- ICT活用アセスメント  
得意・不得意・認知特性  
学習面・行動面の困り感  
個別の支援計画・指導計画

データ化・共有

#### 2.早期対応・個別最適な支援

- アクセシビリティ機能活用  
読み上げ・音声入力・表示変更

- デジタル学習教材活用  
学習ペース・方法の選択

- 教員のICT活用  
個別の支援計画・指導計画  
進捗把握  
きめ細やかな支援と指導

データ化・共有

#### 3.連携と成果の普及

- 学校内外の連携強化  
能美市企画会議  
校内教育支援会議  
ケース会議

- 成果のまとめ・普及啓発  
実践モデル構築  
成果報告書作成  
情報公開  
研修会での成果報告

#### 4.見込まれる成果（KPI）

- ①早期発見の効率化・客観性の向上（アセスメントで短縮された日数：約1か月減）  
（校内支援委員会でデータ利活用を有効と感じる職員の割合：100%）
- ②個別最適な支援への円滑な移行（支援につなげられた児童数の割合：80%）
- ③児童生徒の学習意欲・理解促進・自己肯定感の向上（児童質問紙調査「やりたい・わかる・できる」肯定的回答80%）
- ④教員負担軽減・教育の質の向上（教員意識調査 負担減との回答割合：100% 質が向上との回答100%）

#### 1. 早期発見・客観的把握

従来のWISC等の発達検査にデジタルアセスメントを併用し、客観的根拠に基づいた個々の特性を可視化する。

#### 2. 早期対応・個別最適な支援

認知特性に応じた学びの文房具として端末を活用し、学習への負担を抑えた環境を設定する。

#### 3. 連携と継続

学校・教育委員会・専門家が密に連携し、知見を共有することで組織的な支援体制を確立する。

- ・アクセシビリティ機能等の日常活用で代替手段を保障し、学習上の困難を軽減することで意欲向上を図る。
- ・AIドリルや認知特性に即した教材を提供し、個別最適な学びを通じて着実な学習定着を実現する。
- ・客観的データに基づく支援と事務の迅速化を両立し、組織全体で児童を支える支援体制を強化する。

### 取組内容（詳細）

- ・端末の音声入力等のアクセシビリティ機能を日常的に活用し、書字困難がある児童の思考の表出を保障することで、思考や表現に注力できる環境を整え、学習への自信と意欲を向上させる体制を整えた。
- ・AIドリル等の即時フィードバック機能を活かし、個々の習熟度に合わせた個別最適な学びを実装することで、児童が安心して試行錯誤しながら学習できる環境を構築した。
- ・デジタルツールの導入で客観的な特性把握を迅速化し、早期支援に向けた支援計画や指導計画の策定を推進した。

### 特色・ポイント

- ・デジタルアセスメントで認知特性を可視化し、教員の経験則に頼らないデータに基づいた客観的な学習支援を実現した。
- ・端末を日常的な文房具として活用し、代替手段の保障等を通じて通常の学級での学習環境を整備した。
- ・個別の教育支援計画策定において、特性に応じた記述表現をパソコンで検索・参照できるシステムを活用したことで、教員の経験を問わず迅速かつ質の高い計画策定が可能となった。



### 取組の成果

- ・端末による代替手段の活用で学習上の困り感を取り除き、本来の能力を発揮できる環境を整えたことで、学級全体での学びに自信を持って参加する意欲の高まりが見られた。
- ・特性に応じた多角的な教材提供により、従来の反復学習では困難であった基礎基本の定着が進んだ。
- ・個別の教育支援計画策定等の事務作業を迅速化し、教員の業務負担を軽減することで、児童一人一人と丁寧に向き合い支援する時間を創出できた。

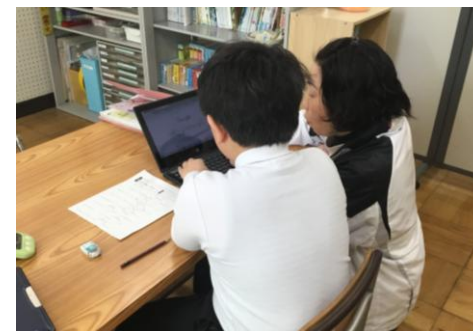
- ・デジタルアセスメントにより客観的な実態把握を推進し、早期支援を可能にするスクリーニング体制を構築する。
- ・デジタル文例集の活用で計画策定を高度化・効率化し、教員が児童と向き合う時間を創出する。
- ・学校・行政・専門家の連携によりチーム学校を具現化し、通級指導の知見を通常の学級へ還元する。

### 取組内容（詳細）

- ・デジタルツールの導入で客観的な特性把握を迅速化し、早期支援に向けた支援計画や指導計画の策定を推進した。
- ・アセスメント結果を校内で共有し、通級の成果を通常学級へ還元することで、支援の連続性を確保した。
- ・デジタルアセスメントで潜在的な困り感を早期に発見し、専門的知見を組み合わせた多角的な実態分析を実施した。

### 特色・ポイント

- ・特性に応じた記述表現をパソコンで検索・参照できるシステムを活用したことで、教員の経験を問わず迅速かつ質の高い個別の教育支援計画の策定が可能になった。
- ・学校・行政・専門家の連携体制を構築し、客観データに基づく多角的な共通理解を形成した。
- ・デジタルツールで個々の特性を可視化し、潜在的な困り感を早期かつ組織的に把握する体制を整えた。



### 取組の成果

- ・特性の可視化により教員の視点が多角化し、客観的なデータ共有を通じて迅速な共通理解が可能となり、学校全体の組織的な支援体制が強化された。
- ・アセスメント結果を担任・通級担当・管理職で共有することで支援方針の共通理解が深まり、通常の学級においても特性に応じた具体的な合理的配慮が展開されるようになった。
- ・個別の教育支援計画策定等の事務作業を迅速化し、教員の業務負担を軽減することで、児童一人一人と丁寧に向き合い支援する時間を創出できた。

## 4 今後の課題と展望

- ・ICT活用を日常的な選択肢として一般化し、全ての児童が心理的負担なく学べる環境整備を推進する。
- ・専門家との連携で得た知見を還元し、学校として質の高い支援を行えるよう組織的な指導力を底上げする。
- ・通級と通常学級の連携を深め支援の連続性を確保するとともに、実践成果を客観的データに基づき検証する。

### 令和7年度事業における課題

#### ① 通常の学級における支援の一般化とインクルーシブ教育の推進

通級で有効なICT活用を、通常の学級の学習基盤として定着させ、特別な支援としない環境作りを進め、支援を受ける児童の心理的負担を解消し、誰もが等しく学べるインクルーシブ教育を推進する必要がある。

#### ② ICT活用の実践の共有と組織的な支援体制の確立

一部の担当者の専門性に依存せず、学校全体でICTを特別支援に活用できるよう、教員の指導力をボトムアップする必要があります。研修等を通じてスキルの標準化を図り、どの学級でも効果的な運用ができる組織体制を確立する必要がある。

#### ③ 通級と通常の学級における支援の連続性の検証

通級での学びが通常の学級での児童の効力感にどう寄与しているか、定量・定性の両面で検証する仕組みを構築する必要がある。通級による指導で取り組んだ手立てを通常の学級での学習に生かしていけるように、支援の連続性を確保する必要もある。

### 令和8年度事業における展望

端末活用を特別な支援から、個性を活かす文房具へと意識改革し、児童自らが特性に合う手段を選択できる自律性を育てていく。端末を自分の武器として使いこなし、意欲を維持して学習に臨む基盤を確立していく。

外部専門家の知見を通級担当者だけに留めず、校内研修等を通じて全教員へ還元・共有していく。専門家との連携を密にして、組織全体で質の高いICT支援を継続できる体制を整えていく。

研究実践校を拡大したり、他自治体の先進事例を導入したりしていく。通級指導教室と通常の学級の連携においては、直接の対話の有効性を踏まえつつ、ICT機器の有効活用を模索し、通級での指導や手立てを通常の学級での学習に還元していく。